

怒れるゾウ 知的に変貌

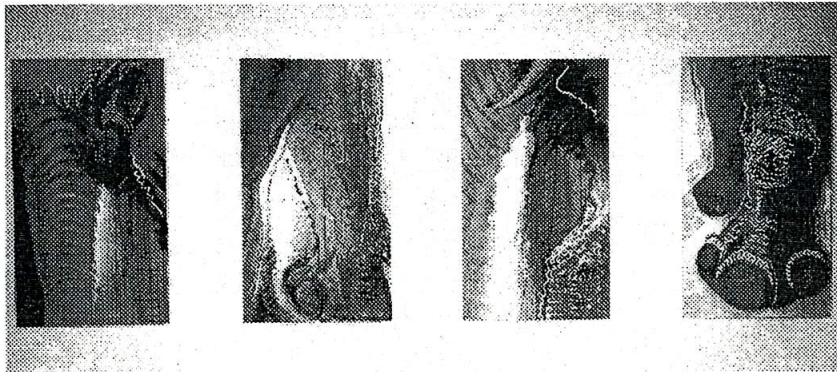
十一月二十九日まで、福岡県立美術館で個展を開いた。ゾウをモチーフにしたおなじみのシリーズだが、印象は随分変わった。画布代わりの麻袋などにどす黒い赤や緑のストロークをほとばしらせたり、色を塗りたくった巨大な縫いぐるみを壁につるしたりしていた以前の作品では、現代文明



美術家 今泉 憲治さん

に対して怨嗟の叫びをあげているかのようだった怒れるゾウが、スマートで知的なゾウに変貌しているのだ。

支持体が段ボールに変わり、色も褐色系だけに抑えられた。代わって、チューブから直接絞り出して渦巻きやギザギザなど動きのある線を描いた木工接着剤の白



今泉憲治さんの「エレファント・アクシデント'98」

の効果が強調されている。与えたとしたら、画面が整切な要素だけで描こうと思っただけです。知的な印象を

「自分にとって本当に大げさな要素だけを描こうと思っただけです。知的な印象を

大を更に押し進める一方、顔を省いたこともあって、ゾウの肉体としてのボリュームや動感、生命感などをそれ自体として抽象したといった印象が強くなった。かつては怒りや悲しみといった沸騰する感情を託されていたはずのゾウが擬人性を脱ぎ捨て、造形的なモチーフとして自立し始めたのだと見ることもできる。ここに顔を出している問題は、形式と内容という古くて新しいテーマであるだろう。造形主義の枠に収まりきらない情動の激しさに、今泉さんの絵画の魅力を感じていた人には物足りない思いのする変化かもしれないが、その辺りは本人も心得ているらしい。「もともと私には表現主義的などころがありますから」。この言葉は次回の発表に向けての「このころ、ご期待」のあいさつと受け取ってよさそうだ。

一九五四年、福岡市生まれ。中村学園大勤務。今春、教授になった。